参考資料②〈各学年の特徴と発達段階に応じた指導の工夫例〉令和２年度少人数教育推進検討委員会報告書より

<table>
<tr><td>校種</td><td colspan="4">小学校</td></tr>
<tr><td>学年</td><td>第１学年</td><td>第２学年</td><td>第３学年</td><td>第４学年</td></tr>
<tr><td>各学年の特徴</td><td colspan="2">・幼児教育と小学校教育の円滑な接続
・具体的な活動や体験を通した学習が大切な時期
・友達の大切さを実感させることが大切な時期
・学校での生活に慣れ、学校生活を楽しく送ることができるようにすることが大切な時期</td><td colspan="2">・社会、理科、総合的な学習の時間、外国語活動が始まる。（第３学年）
・より各教科等の特質に応じた学びにつなげる時期
・教科を横断した学びが始まる時期
・生活集団において、日頃から切磋琢磨したり、多様な意見に触れたりする機会が増えてくる時期
・児童会活動を中心とした自治的、自発的な活動への参画</td></tr>
<tr><td>発達段階に応じた指導の工夫の観点例</td><td colspan="2">・小学校生活に慣れるために、児童一人一人に対応したきめ細かな指導の充実を図る。
・基礎的・基本的な学習習慣・生活習慣の確立を図る。</td><td colspan="2">・児童生徒一人一人に対応したきめ細かな指導の充実を図る。
・発達段階に応じて、学級集団の質を高め、児童生徒一人一人の考えを生かした指導の充実を図る。
・児童生徒が切磋琢磨できる環境を確保し、社会性や協調性、たくましさの育成を図る。</td></tr>
<tr><td>学級集団づくりの工夫</td><td colspan="2">学級集団による生活に慣れる
（学校生活を楽しく送ることができる指導）</td><td colspan="2">学級集団の基礎をつくる
（より大きな集団においても個人と集団が調和的に発達できる指導）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">授業づくりの工夫</td><td colspan="2">・他学年より少人数でのきめ細かな指導
・一人一人のつまずきを早期に見いだす
・中学年以降の学習の素地を形成する</td><td colspan="2">・お互いに切磋琢磨するような関係やいろいろな友達と関わる場の設定
・考えを出し合って考えを練り合う授業
・児童生徒が班や係等のグループ活動で、リーダーを多数経験できる環境の設定
・合奏や合唱、グループでの表現活動、体育的活動がダイナミックにできる場の設定</td></tr>
<tr><td colspan="4">・主体的・対話的で深い学びの視点に基づいた授業改善　　・ICT を活用したきめ細かな教育</td></tr>
<tr><td>文部科学省(H29)
小学校学習指導要領解説総則編
中学校学習指導要領解説総則編
（抜粋）</td><td colspan="2">低学年は、幼児期の教育を通して育まれてきたことを基に、学習の質に大きく関わる語彙量を増やすことなど基礎的な知識及び技能の定着や、感性を豊かに働かせ、身近な出来事から気付きを得て考えるなど、中学年以降の学習の素地を形成していく時期である。この２年間で生じる学力差が、その後の学力差の拡大に大きく影響しているとの課題も指摘されており、一人一人のつまずきを早期に見いだし、指導上の配慮を行っていくことが重要である。(p20)</td><td colspan="2">中学年は、生活科の学習が終わり、社会科や理科の学習が始まるなど、具体的な活動や体験を通して低学年で身に付けたことを、より各教科等の特質に応じた学びにつなげていく時期である。指導事項も次第に抽象的な内容に近づいていく段階であり、そうした内容を扱う学習に円滑に移行できるような指導上の配慮が課題となる。(p20)</td></tr>
<tr><td>文部科学省(H29)
小学校
学習指導要領解説特別活動編
中学校学習指導要領解説特別活動編
（抜粋）</td><td colspan="2">就学前教育との関連を図り、入学当初から徐々に大きな集団における幅広い人間関係の中で活動できるようにし、集団で活動する楽しさを味わわせたり、上学年の児童が温かく見守るようにしたりするなどして、安心して学校に通えるようにすることが大切である。
集団活動を通して他者に対して行ってよいことや悪いことをしっかりと自覚できるようにすることが大切である。その他にも、友達の大切さを実感させたり、徐々に児童が学校での生活に慣れるようにしたりして、学校生活を楽しく送ることができるように計画的に指導することが重要である。
様々な集団活動や体験活動を通して、児童が協力したり助け合ったりして学校生活を楽しくする（中略）ことができるようにすることが大切である。(p27)</td><td colspan="2">低学年の経験を生かしつつ、例えば、児童の集団活動に対する強い興味・関心の出現、自発的な活動の高まりなどを積極的に生かし、特に楽しく豊かな学級生活づくりのための係活動などの充実を図ったり、多様な集団に所属してよりよい人間関係を築く態度を形成するための活動を充実させたりする必要がある。
生活や遊びのきまりをつくって守る活動やよりよい生活を築くために集団としての合意形成の方法などを理解して話し合う活動ができるようにしたり、集団の秩序や規範、集団活動の方法などを自分たちでつくり上げたり、そのための方法を身に付けたりすることができるように指導することも大切である。さらには、高学年に向けて学年の集団など他の学級と一緒に活動に取り組む機会を適切に設けるなどして、より大きな集団においても個人と集団が調和的に発達できるようにすることが大切である。
様々な集団活動や体験活動を通して、互いを尊重し、協力し合って学級づくりに主体的に参画する（中略）ように指導することも大切である。(p28)</td></tr>
</table>

<table>
<tr><th colspan="2">小学校</th><th colspan="3">中学校</th></tr>
<tr><th>第５学年</th><th>第６学年</th><th>第１学年</th><th>第２学年</th><th>第３学年</th></tr>
<tr><td colspan="2">・小学校教育と中学校教育の円滑な接続
・家庭科、外国語科が始まる。（第５学年）
・一部教科担任制による、より専門的な学習
（算数、理科、外国語等）
・小学校段階において育成を目指す資質・能力を育む時期
・思春期にさしかかり、多様な他者と切磋琢磨しつつお互いの価値観を認めることの大切さを実感する時期</td><td colspan="3">・小学校教育と中学校教育の円滑な接続
・教科担任制による、より専門的な学び
・中学校段階において育成を目指す資質・能力を育む時期
・多くの友達と触れ合い、豊かな人間関係、多様性に対する認識を広げることが重要な時期</td></tr>
<tr><td colspan="2">同左</td><td colspan="3">同左</td></tr>
<tr><td colspan="2">学級集団の質を高める
（社会的自立を高める中学校への指導につなぐことができる指導）</td><td colspan="3">学級集団の質をより高める
（生徒が自らの力で組織を作り、活動計画を立て、協力し合って学びに向かう集団づくりができるように導く）</td></tr>
<tr><td colspan="2">同左</td><td colspan="3">同左</td></tr>
<tr><td colspan="5">同左</td></tr>
<tr><td colspan="2">高学年は、児童の抽象的な思考が高まる時期であり、教科等の学習内容をより深め、小学校段階において育成を目指す資質・能力を育み、中学校以降の教育に確実につなげていくことが重要である。（p20）</td><td colspan="3">中学校段階は小学校段階と比べ心身の発達上の変化が著しく、また、生徒の能力・適正、興味・関心等の多様化が一層進展するとともに、内面的な成熟へと進み、性的にも成熟し、知的な面では抽象的、論理的な思考が発達するとともに社会性なども発達してくる。また、年齢的には 12 歳から 15 歳までという、成長が著しい時期に当たるので、学年による生徒の発達の差違にも留意しなければならない。各学校においては、このような生徒の発達の段階を的確に把握し、これに応じた適切な教育を展開することが必要である。（p19）</td></tr>
<tr><td colspan="2">高学年としての役割や責任を果たしたり、リーダーシップを発揮したりする活動を多様に設定するとともに、多様な他者を認めることの大切さを実感できるようにしたり、友人関係の大切さについて、経験を通して理解できるようにしたりすることが大切である。
よりよい自己実現を図るため、希望や目標をもって生きることの意義や、現在及び将来の自己の生き方を取り上げたり、中学校の学級活動等の指導との関連を図った指導計画を作成したりするなど、小中の接続に関わる課題に配慮し、社会的な自立を高める中学校への指導につなぐことができるような教育活動を重視する必要がある。
様々な集団活動や体験的な活動を通して、互いに信頼し支え合い、学級や学校の生活づくりに主体的に参画する（中略）ことができるように指導することも大切である。（p29～p30）</td><td colspan="3">中学校段階の生徒の成長の過程における主な特徴としては、思春期に入り、親や周りの友達と異なる自分独自の内面の世界があることに気付いていくことが挙げられる。また、内面の世界が周りの友達にもあることに気付き、友人との関係が自分に意味を与えてくれると感じる。（中略）このように中学生の時期には、自我の目覚めや心身の発達により自主独立の要求が高まることから、生徒の自発的、自治的な活動を可能な範囲で尊重し、生徒が自らの力で組織を作り、活動計画を立て、協力し合って学びに向かう集団づくりができるように導くことが大切になる。
生徒の自主性が高まるとはいえ、生活経験や社会体験もまだ十分でなく、自分の考えも十分な自信がもてない時期でもあるため、当然教師の適切な指導や個別的な援助が必要である。（中略）他者、社会、自然などの環境との関わりの中で生きるという自覚を持って成長していくことができるようにすることが大切である。そのためには学校における多様な集団活動の充実を図ること（中略）が重要である。（p25～p26）</td></tr>
</table>